



若松仮設住宅の食事会にて

地震も強いが、あの震災から3年余り、神戸は今

ことが決まり、場所を空けることになりました。

しかし、さいわいなことに、隣の公園予定地を行政から借りることができ、3月末より4月初めにかけて、5棟あつたプレハブのうち1棟を移動。その中に5団体（ひまわりの会、春風会、すたあと長田、ベトナム人作業所、公的支援）が事務所を設置し、新たなスタートを切りました。

「やっぱり、元住んでいた所に愛着ありますから……」

震災から3年。復興の道はなお陥しいものがあります。住宅再建を果たす人が増える一方で、住んでいた街に戻るめどがたたず、離れていく人が少なくありません。約1万2千世帯にのぼる仮設住宅において

「魂が試されているんや」――雄々しく逞しく復興に取り組む人たち

も、恒久住宅への移転を決めている人がいる一方、4千世帯を超える人たちが今後の住まいにめどをたてられないままです。さらに、大震災が及ぼした激しいショックや生活の変化で「心の問題」に悩む被災者は、いつたん減少傾向にあったものの、今年に入つて再び増加しています。

さて、かつてSVA神戸事務所のあつた、長田区御蔵5の5は、兵庫商会の田中社長のご厚意によつて、多数のボランティアグループがフレハブを建て、長い間活動の拠点とさせて頂いてきました。が、この度、この地に住民の方が共（住宅を再建する

人たちにお話をうかがうことができました。そこに、マスコミなどで公表される被害や復興状況のデータからはうかがい知れない、一人ひとりの人生ドラマが浮かびあがってきます。

そして、ただ災害から復興するだけでなく、地域に根ざした新しい町づくり、伸びくくりに取り組む気概のほどが伝わってきます。

「こんな人たちが、こんな思いで頑張っているんだ」――。今まで知つているつもりだった神戸の人たちの新たな姿が見えてきます。

「他人のせいやない。あきらめたらあかんのや」

ひまわりの会・玉山 澄子さん

勉強するのが一番楽しい

「今は勉強するのが楽しくてたまらんわ」

玉山澄子（76）さんは、SVAが支援している識字教室「ひまわりの会」で学んでいる。18年前、すでに主人は他界され、現在、神戸市長田区の御蔵1丁目に、23歳になるお孫さんと2人暮らし。かつて、夜間中

学校に通つた時期もあるが、「ひまわりの会」ができたことを知り、矢も盾もたまらず、飛び込んできたのだ。今春からは定期制浜田高

校にも通つている。

玉山さんが勉強熱心なのは訳がある。玉山さんは大正10年、韓国釜山の近郊で生まれた。幼い頃、勉強が好きな子だったが、「女

は勉強させるとロクなことをしないから」と親に言われ、学校に通わせてもらえたかった。

その後は、ともかく毎日生活することに必死で勉強どころではなかつた。時代が変わり、自由に勉強できるようになつた今、失つた少女時代を取り戻し、数十年ぶりにやつてきた青春を詠歌しているように見える。

韓国から日本へ 激動の人生

玉山さんは、17歳の時、否応なく、親の言ひ込んでいたのだ。今春からは定期制浜田高

校にも通つている。

山口から神戸へ

災難と苦労の連続であつた。山口県の下関に落ち着き、軌道に乗つたと思つたのも束の間、空襲に見舞われ家は全焼。奇跡的に家族全員うまく10歳違いの夫と結婚しなければならなかつた。そして、翌年、最初の子を授け、太平洋戦争開戦の年、日本の占領下、夫の徴用のため、日本に渡ってきたのだ。そこからが

山口さんは重労働である。田植えに10日間もかかる有様だった。手も身体もボロボロになつて、「これではとても身体がもたない」と、昭和37年、21年にわたる山口での生活に区切りをつけて、神戸に移り住むことを決意した。

運命の日

「隣の家がめり込んできて、タンスが私の上に倒れて、気がついたら瓦礫のなかに埋もれてたわ。向かいの家のにいちやんが助け出してくれて……」危ういところで玉山さんは九死に一生をと

度も出かけた。韓国の寺も3年かけて、全部お参りした。そして平成七年、大震災が神戸を襲つたのだ。

「駅で「○○行きは何時何分に出ますか?」と訊いたら、「あそこにかけてあるんやから、見りやわかるやろ」と言われて、「読めるんやつたら誰がきくか」読めへんからさくくんや」思つてな。ほんまに悔しかつた……」

以来、神戸市丸山中学校の西野分校に通つて、必死になつて識字の勉強をした。すでに年齢は50代に達していた。そして、とりあえずは病院に行つても困らないようになり、駅で切符を買って目的地に行けるようになつた――。



玉山 澄子さん



「ひまわりの会」で学ぶ玉山さん

「神戸からのメッセージ」――

区板宿近くに住んでいた娘さん（次女）が亡くなってしまった。結婚相手も決まっていた矢先のことだった。玉山さんは食事も喉を通らず憔悴の日々であった。「神も仏もあるか」――。やり場のない思いを、自宅でこう叫んでぶつけるはかなかった。

「しばらくは友達と会うのもいややつた。『信心しているのに、なんであんたの娘が亡くなるんや』言われるのがいややつたからな」しかし、そんな気持ちが吹き切れたのは、ある日、お寺参りをしている時だった。不思議な体験だった。

「手を合わせていると、『神さまが決めたことだから、何ともできないんや。いつまで

**卒業証書を
棺桶に入れて死にたい**

「なんも高
い
みなんてあらへんねん。勉

げた。しかし、いたましいことに、同じ長田

もメソメソしていると娘が成仏できないぞ」という声が聞こえたんや。そや！人生に起きることは全部、自分の運命なんや、誰が悪いせいやない。しつかりうけとめなあかんのやと思うてな」――

玉山さんは、幾度となく、「すべては運命なんや」と語る。それは、決して、ただの「あきらめ」の心情なのではない。幾多の試練を越えて達した人生への覚悟のほどなのである。

竹内さんは、長田区御蔵5丁目で、ご主人が経営する鉄工所の経理や事務の仕事に携わっているのだが、その一方で、「みくら5、6、7わが街の会」の代表をつとめている。

竹内さんは、長田区御蔵5丁目で、ご主人が経営する鉄工所の経理や事務の仕事に携わっているのだが、その一方で、「みくら5、6、7わが街の会」の代表をつとめている。



竹内 千恵子さん

御蔵のまちづくりと竹内千恵子さん

私が立ち上がった日

「震災後、もっと住民同士の心のつながりがもてる場づくりが必要だと思って、立ち上げることにしたんです」。

竹内千恵子さん（55）は町づくりにかける思いを語る。物腰の柔らかな上品な方である。おだやかな言葉のうちに、並々ならぬ情熱と思慮深さが滲みでている。

ふるさとなんです

御蔵は第一の



毎週土曜日に行われる「ひまわりの会」の読み書き学級

強してちょっとでも頭入ればいいと思ってるわ。こないして勉強してると、娘のことクヨクヨ考へんですむし……」「プリント出して、ひまわりの会の勉強したり、高校の宿題やつたり、とても忙くて」（笑い）

若い頃には、男まさりの馬力があつて、「ヒコーキ」と呼ばれたという玉山さん。体力は衰えたというが、学びへの意欲と面倒みのよさは益々盛んである。

「高校卒業は80の時やけど、それまで生きてお棺に卒業証書を入れて死にたいわ。あんまり頑張らなくていいんだからね。勉強してお棺に卒業証書を入れて死にたいわ。あん

たもお母さんが眼つぶる前に親孝行しいや。息子や娘と同じ年格好やから、お母さんの気持ちようわかるわ……」「いらん、説教してしまったな」

読み書きに不自由している人の数は、全国で約170万人、兵庫県内では約3万人といわれる。その多くは、かつて貧困や差別、病気などのために学校に行けなかつたお年寄りたちである。

「自宅のある鳴子地区は、家の物が倒れたり、工場に向かって驚きました。町は瓦礫の山と化して、事務所の中はメチャメチャでした。



震災後の街の様子を説明してくれる竹内さん

さんも自身も、長をつとめてきたが、建物の再建や区画整理等々、物理的な復興への取り組みが主であったため、もつと住民同士の絆づくりが必要と思うようになってきた。そこで、集会所でお茶会を催したり、憎憎を呼んで法話を頼むことになったのだ。

そして、96年5月、竹内さんが中心となり、街の復興のため、住民同士が集い励ました。街の会として、「みくら5、6、7わ

が街の会」を発足させることになったのだ。

昨年は、クリーン作戦（大掃除）を行う一方、夏には「みくら夏まつり」、冬には餅つきを行ったり、そして、この4月には上月町の老人クラブ連合会との交流会をもつたり、住民同士の絆を深め、住宅再建のための智恵を学ぶ活動を展開してきた。

人の心がわかれれば 楽なんですが

絆づくりの歩みは、一人ひとりと出会って、はたらきかけていく地道な積み重ねである。苦労もある。「お年寄りの世話を一緒に」と、地域の人々に呼びかけてきたが、つれない反応に、つい弱気になることもあるという。

「もういいや」と思う時もあるんだ。

「住む家もないのに年寄りの世話などできまへん」という人が多いんです。竹内さんは住む家があるからいいんや」と言われた時には、本当に……。でも無理もないんです。

人の心の奥にあるものを受け取っていくのがしんどいと竹内さんは語る。

「震災前だと、それなりにやっていたんですけど、震災後はそうはいきません。こんなに声をかけるきっかけがつくれればと思つて……」

阪神大震災後、地域復興のためのグループとして、いちはやく、「御蔵通5、6丁目、町づくり協議会」が発足した。そして、竹内

これが私の理想です

「御蔵は私にとって第2のふるさとですか

ら」――。

実は、竹内さんは兵庫県生野町上生野生生である。江戸時代以降、金や銀の採掘地として知られた所である。ところが、昭和47年の生まれ故郷は、銀山ダム建設のため、湖底に沈むことになってしまった。鉄工所の嫁として、神戸の御蔵にとついだ6年後のことであつた。望郷の思いがさらに御蔵という土地と、その人々への愛着を強いものにしている。それでもある……。

竹内さんは、この会を母体として、この街の自治会や婦人会が生まれていけばいいと願

っている。理想とする「ふるさと御蔵」を次のように語ってくれた。

「日本は高齢化がどんどん進んでいくわけですが、行政だけに頼つていられないことが震災を通してよくわかりました。若い人が近所の高齢者を訪ねていて助け合えるような、そんな町になればいいなと思っています」。

震災前、御蔵5、6丁目に住んでいたのは約350世帯。現在は約70~80世帯である。約8割の方が戻っていない。戻れない理由は、持ち家の人の場合は「都市計画」「資金問題」「高齢」など。借家の場合は、「家主が再建しない」などである。

私たちを待つていて 人がいるんや

春風会の北村 弘子さん

食事会の朝、春風が吹く

「おはよう」「持ってきた茄子、ここへ置いて」と、「このブチトマト、えらいきれいやん」――。

水曜の朝、午前10時をまわると、若松仮設住宅の一室は、婦人たちの声で活気を帯び始める。そこは自治会の部屋。毎月2回、春風会が手伝っている「食事会」の日である。会のボランティアたちが次々にやつてきて、エ



北村 弘子さん